

令和3年度 国際バカロレア（IB）を活用した大学進学に関する調査（要約）

大学-1) IBを活用した大学入学者選抜に関する基礎調査分析

大学-2) IBを活用した大学入学者に関するアンケート調査

高校-1-1) IB生進路決定等実態調査（生徒）

高校-1-2) IB生進路決定等実態調査（進路指導教員）

高校-2) 日本語DP（DLDP）と英語DPの比較調査

【調査実施主体】

文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局

【調査対象】

大学-1), 大学-2): IB生を活用した入試を実施している国内68大学

高校-1), 高校-2): 日本国内のIBディプロマ・プログラム認定校・候補校のうち、学校教育法第一条に定める学校

【注意事項】

・本基礎調査分析は、「IB入試に関する啓発アプローチ」に基づく国内実態調査」（令和3年12月時点）における回答内容及び、公開されている大学募集要項の情報に基づき、まとめたものである。

令和3年度 国際バカロレア（IB）を活用した大学進学に関する調査（要約）



【概要】

文部科学省IB教育推進コンソーシアムにより行われた調査報告の要約を示す。

- **大学1) -入試** 「IBを活用した大学入試選抜の実態調査」における、IB生を活用した入試を実施している国内68大学からの回答内容と公開されている募集要項の情報を加えた、IB生を対象にした入試に関する調査分析。
- **高校1) -進路** IB生（高校3年生）または修了生を対象とした、在学中にIBコースを選んだ理由及び進学に関する実態の調査分析。日本国内のIBディプロマ・プログラム認定校・候補校のうち、学校教育法第一条に定める学校を対象とした、進路指導に関するアンケートの調査分析。
- **高校2) -日本語DP運営** 日本国内のIBデュアルランゲージ・ディプロマプログラム（日本語DP）導入校におけるプログラム運営の実態に関する調査分析。

大学-1) IBを活用した大学入学者選抜に関する基礎調査分析



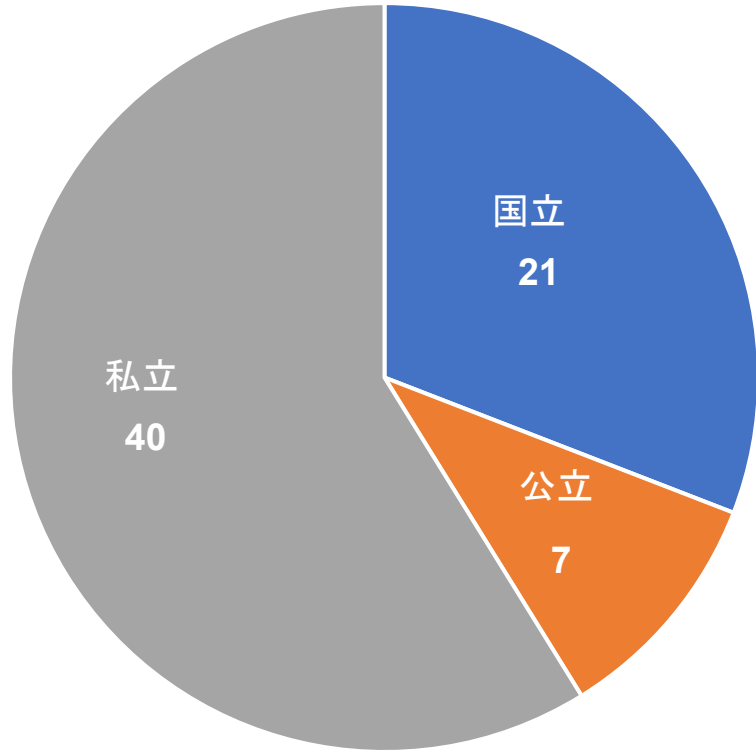
【概要】

”国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜”における傾向を分析した。

1. 国内の大学で何らかの形でIB生を対象にした（＝活用した）入試を行っている所は68大学。多くの理工系の学部でIBを活用した入試をしている。
2. IB生であることが出願要件になっているIB選抜型入試は全体の半数強。残りはIBが出願のための資格の一つである総合型選抜（AO）入試と推薦入試。
3. 出願時にIBスコアの提出を要求するのはIB選抜では国立、公立はほぼ100%。
4. 綜合成績の提出を要求する場合と、言語のスコアのみを使う入試がある。綜合成績を要求する場合は半数強が30点以上。

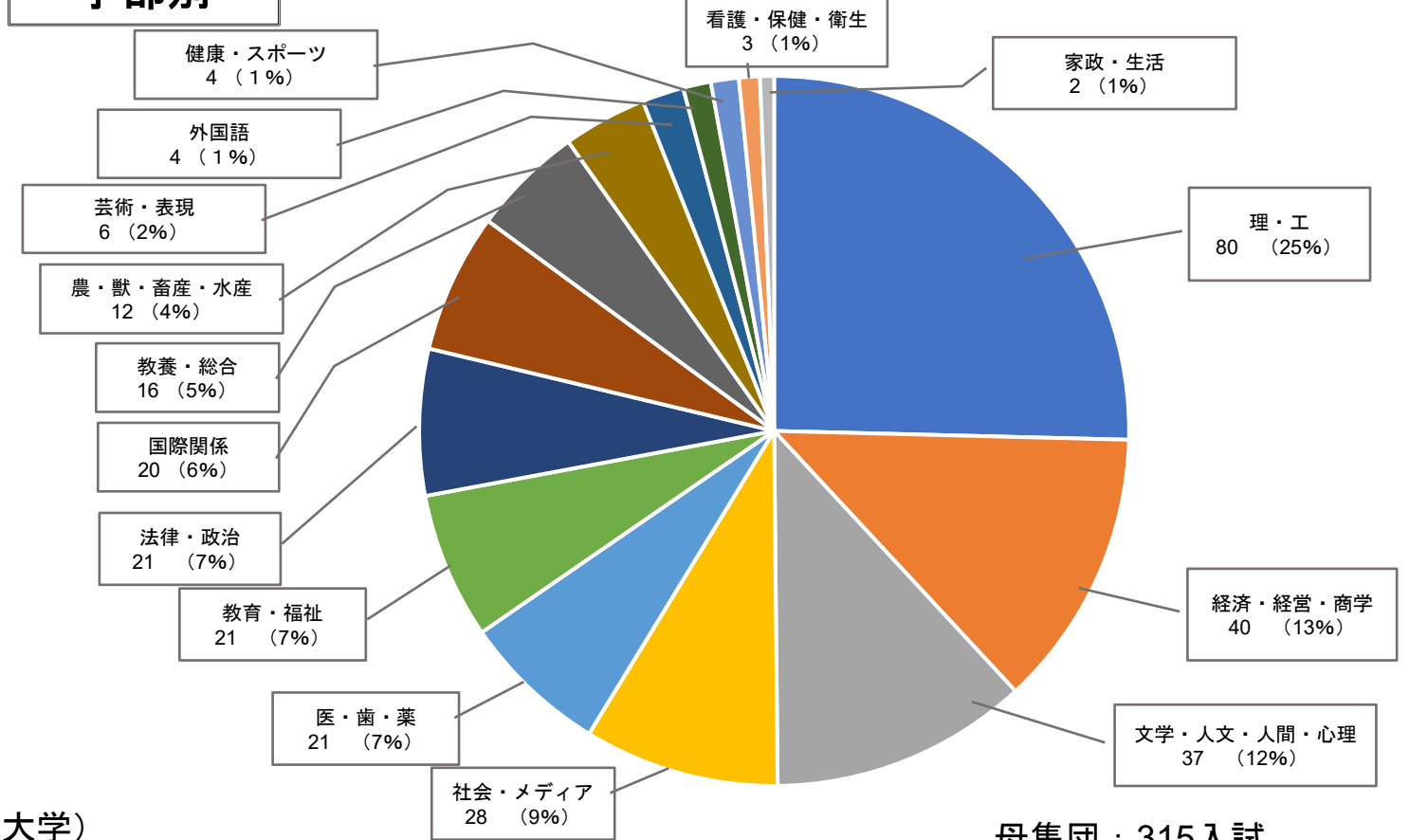
IBを活用した入試を実施している大学・学部

大学別



母集団：学校数（計68大学）

学部別



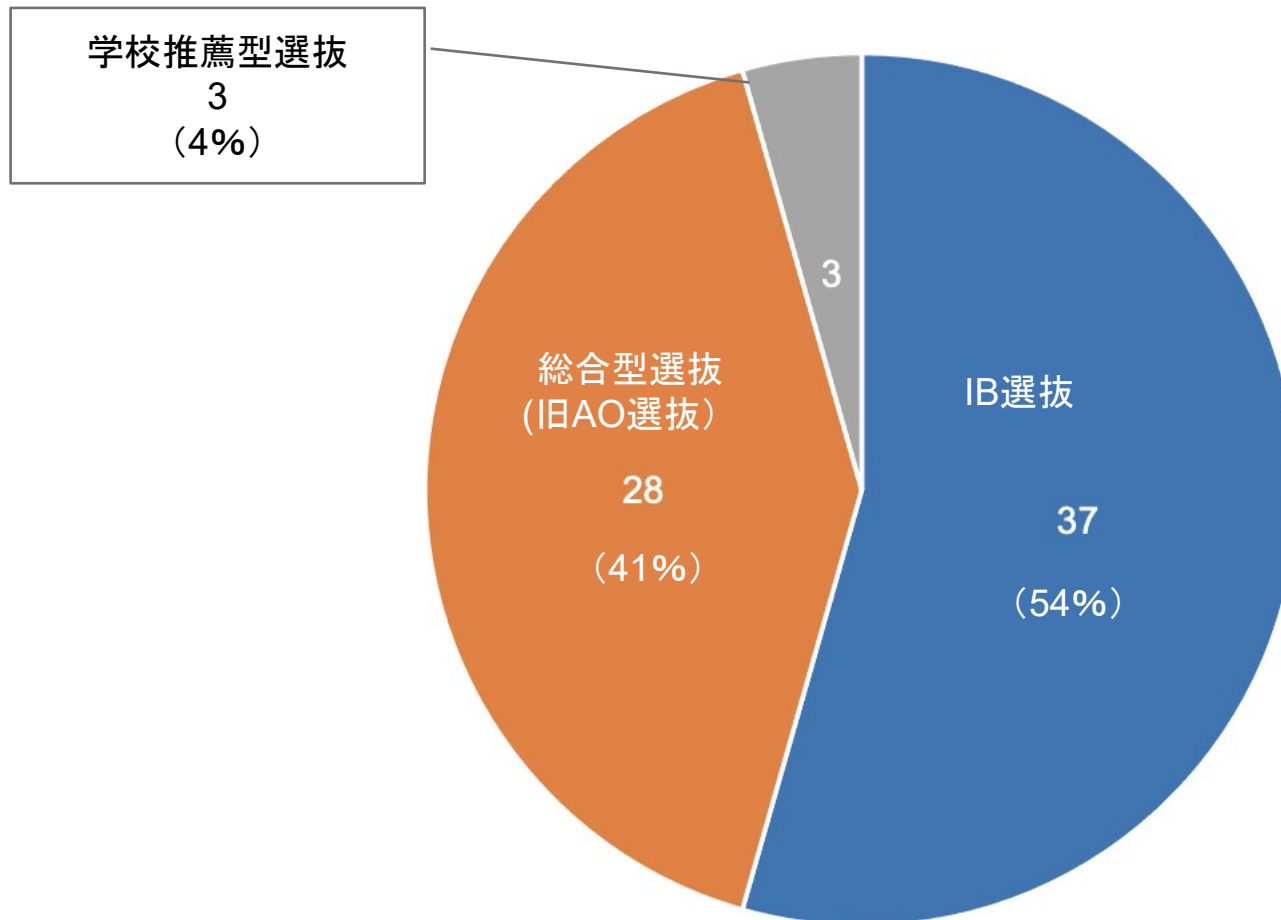
母集団：315入試

[大学種別]

- 調査時点においてIBを活用した入試を実施していると回答のあった大学は68校。

[入試種別]

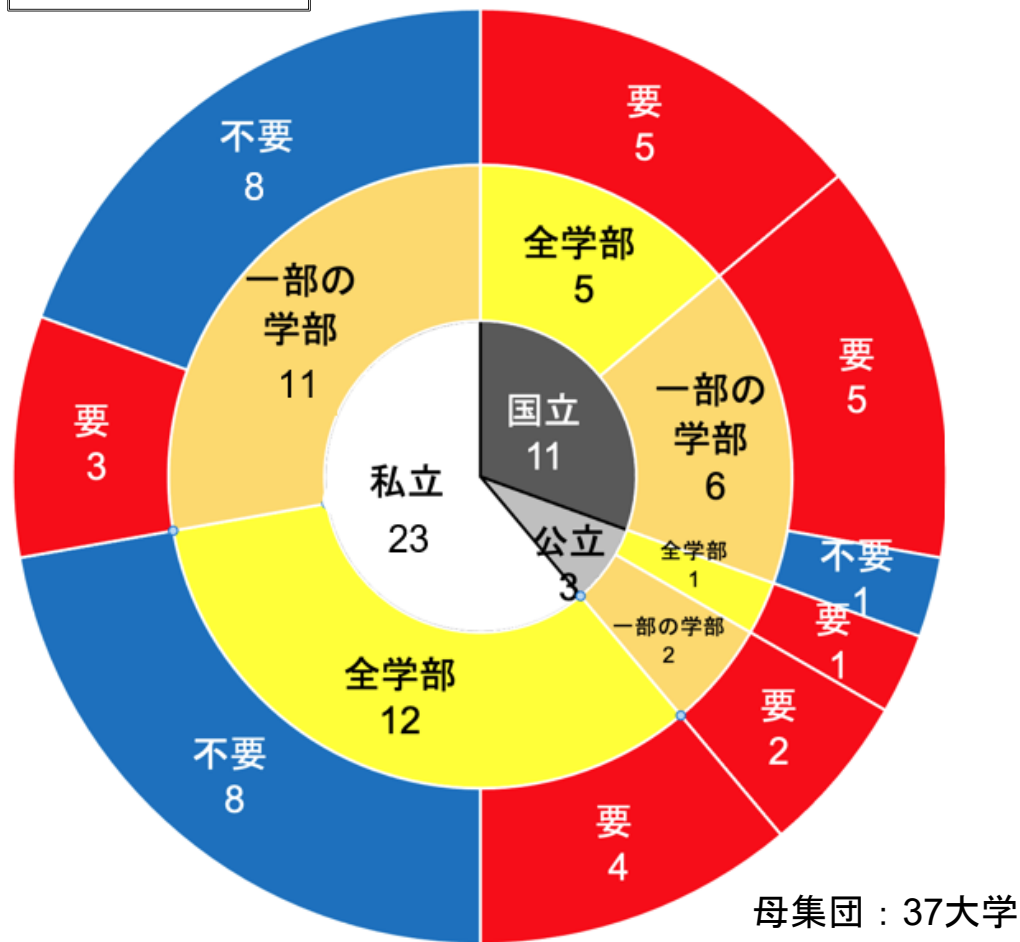
- IBを活用した入試を導入している68大学において、IBを活用した入試数は315。
- 理・工系にて最も多く実施されており、「経済・経営・商学」「文学・人文・人間・心理」の順に続く。



- IBを活用した入試を導入している68大学において実施されている入試種別は「IB選抜」が最も多く、「総合型選抜（旧AO入試）」、「学校推薦型入試」の順となっている。

(注：「IB選抜」には、IB資格取得者・取得予定者のみを対象としたIB入試に加え、IB生に独自の募集枠を設けた入試も含まれている。)

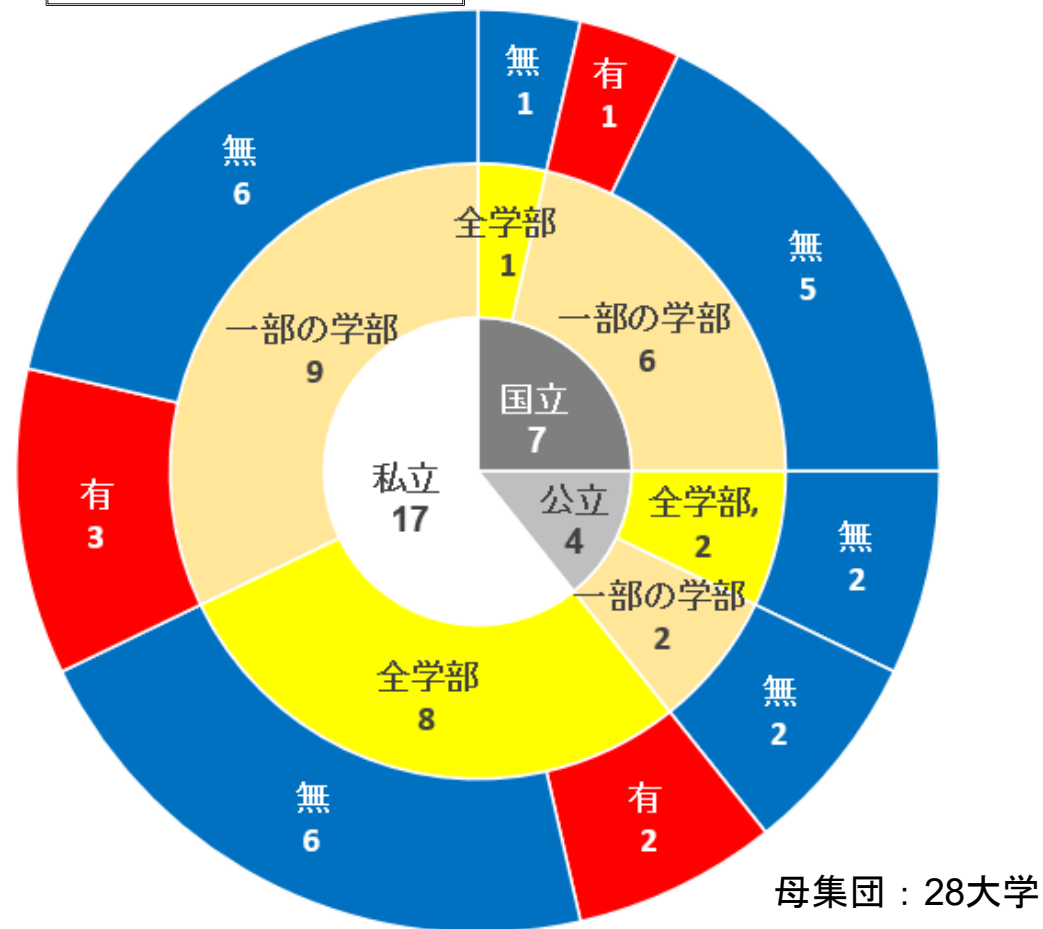
IB選抜



総合型選抜
(旧AO選抜)

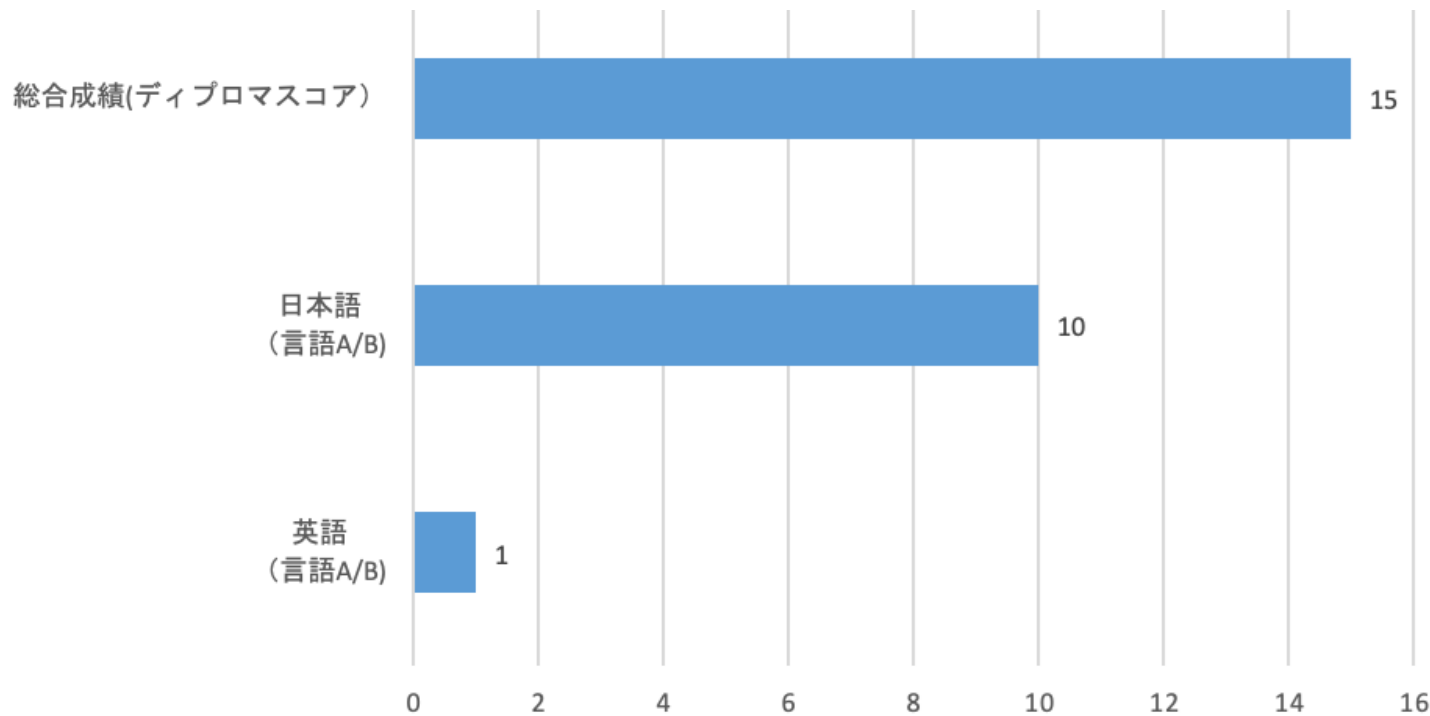
IBスコア基準の公表： 有

IBスコア基準の公表： 無



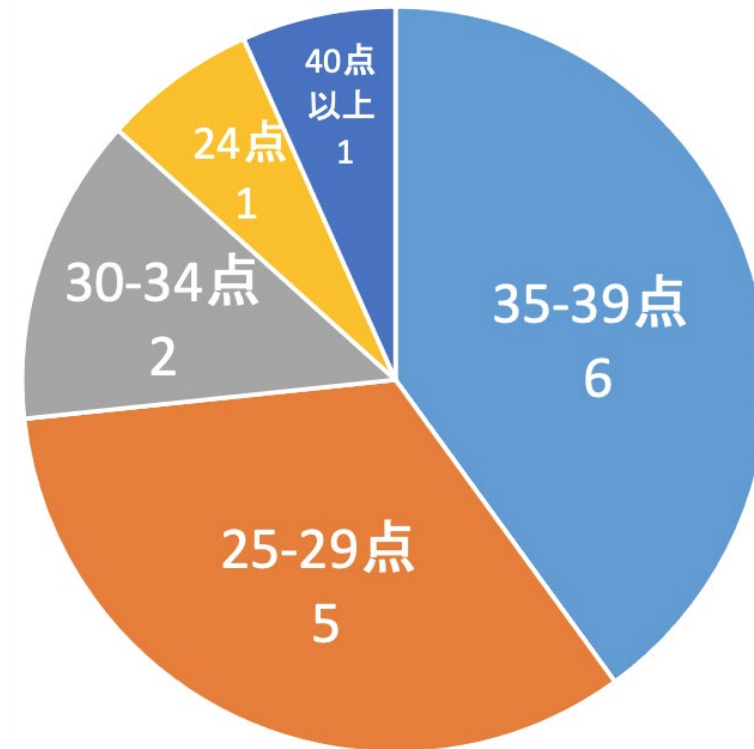
- 「IB選抜」入試において、国立大学の出願にIBスコアを必要とする入試が多いが、私立大学では不要のものが多い。
- 「総合型選抜」入試においては、出願にIBスコアを必要としないものが多い。

スコア基準の種別



母集団：26大学
(各種スコア基準を設けている全大学)

総合成績スコア基準



母集団：15大学
(総合成績要件を設けている全大学)

[スコア基準の種別]

- スコア基準の種別は総合成績を設けている大学が最も多く、日本語（言語A/B）、英語（言語A/B）の順となっている。

[総合成績スコア基準]

- スコア基準のうち、総合成績（ディプロマスコア）スコア設定のある大学は15大学、大学間の平均値は31.9点

大学-2) IBを活用した大学入学者に関するアンケート調査（要約）



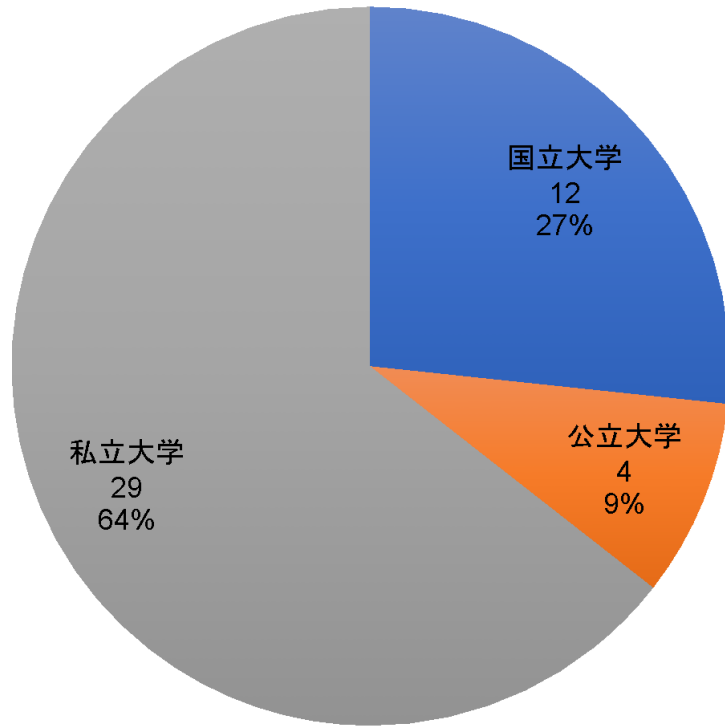
【概要】

”国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜”を行う大学に対し、学生に関する入学後の印象を聞き取り、その傾向を分析した。

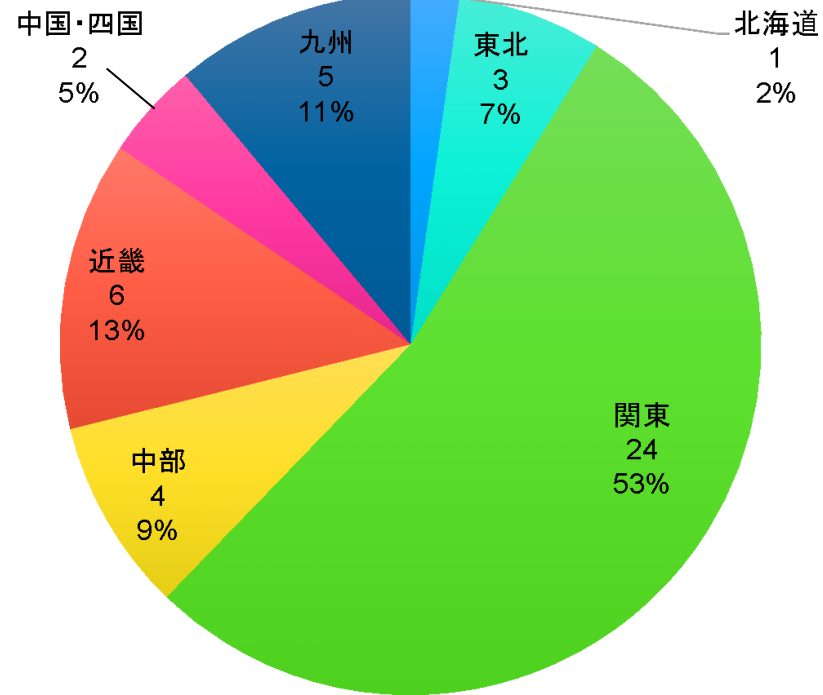
1. IBを入試で活用する目的は、グローバル人材への注力、多様性の確保。
2. 入学する学生に期待する資質としては、語学力のほかは主体性、課題解決等の非認知能力。
3. 英語力を要求する場合は、専門的な高い能力を要求するのは半分弱。
4. 入学後のIB生に対する評価は約8割が満足し高く評価している。

アンケート回答のあったIBを活用した入試を実施中の45大学の属性

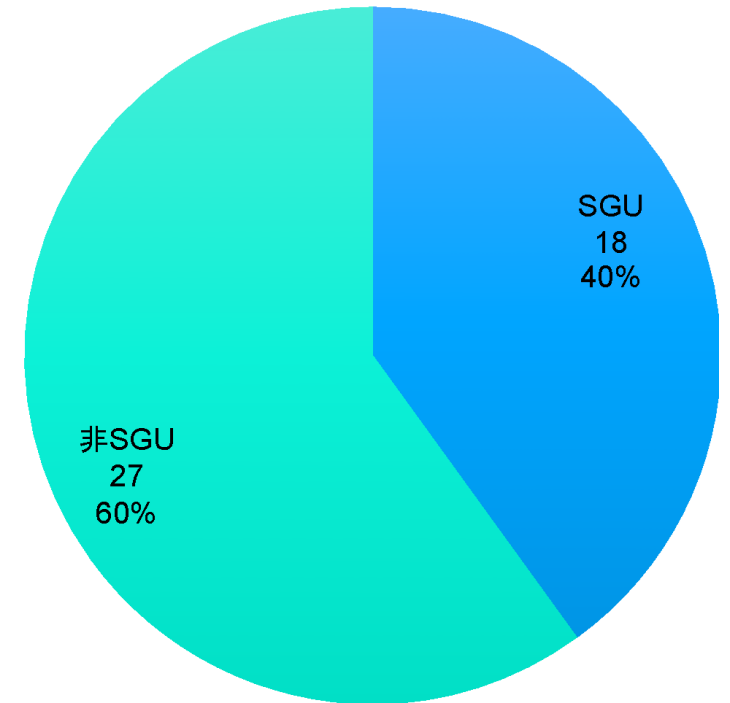
国立・公立・私立



地域別



SGU / 非SGU

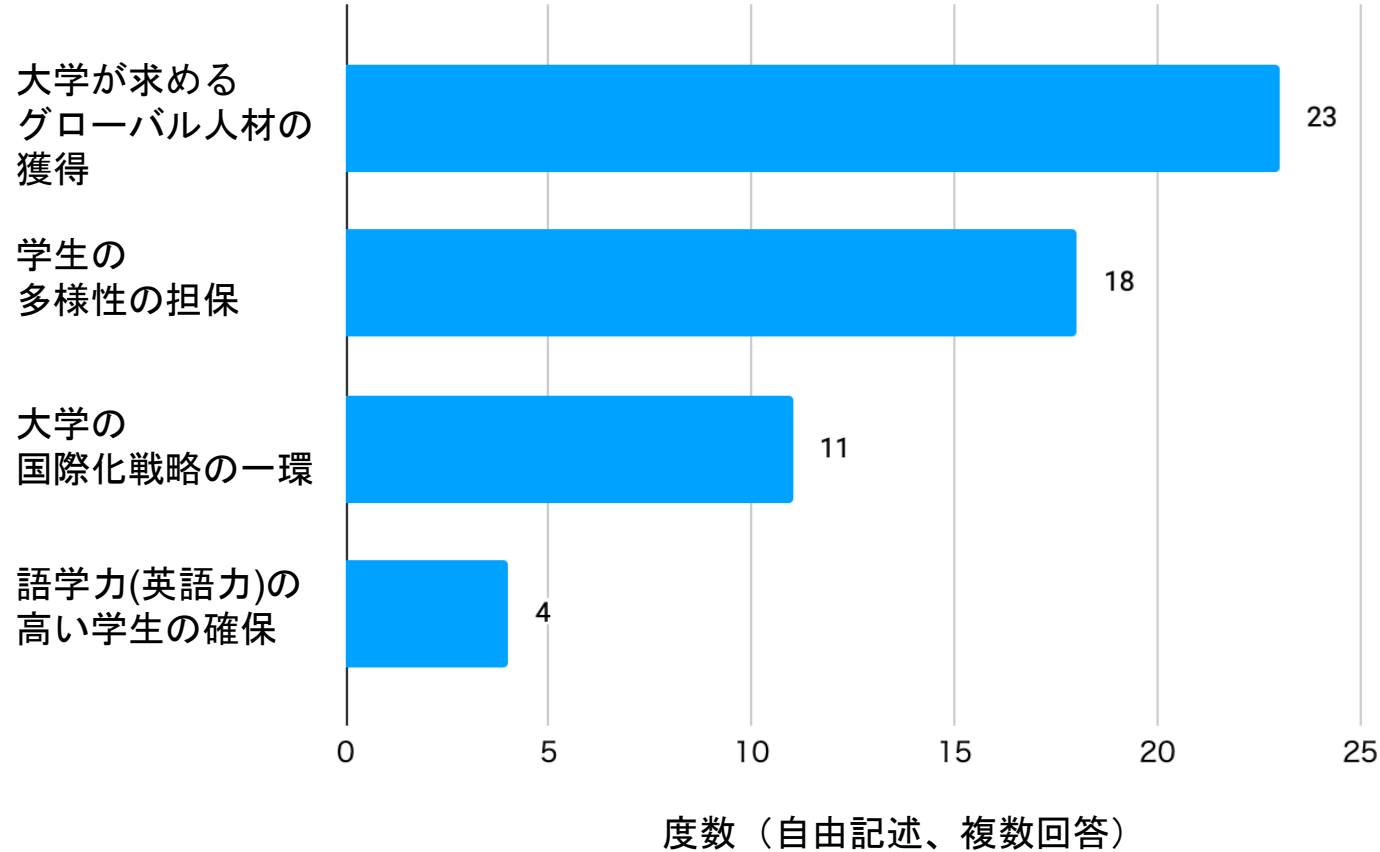


母集団：45大学

アンケートに回答のあったIBを活用した入試を実施中の45大学の属性は

- ・ 国立12大学、公立4大学、私立29大学
- ・ 地域別では回答の多い順に関東（24大学）、近畿（6大学）、九州（3大学）他となっている。
- ・ スーパーグローバル大学（SGU）認定を受けている大学は4割。

IBを活用した入試を導入した目的

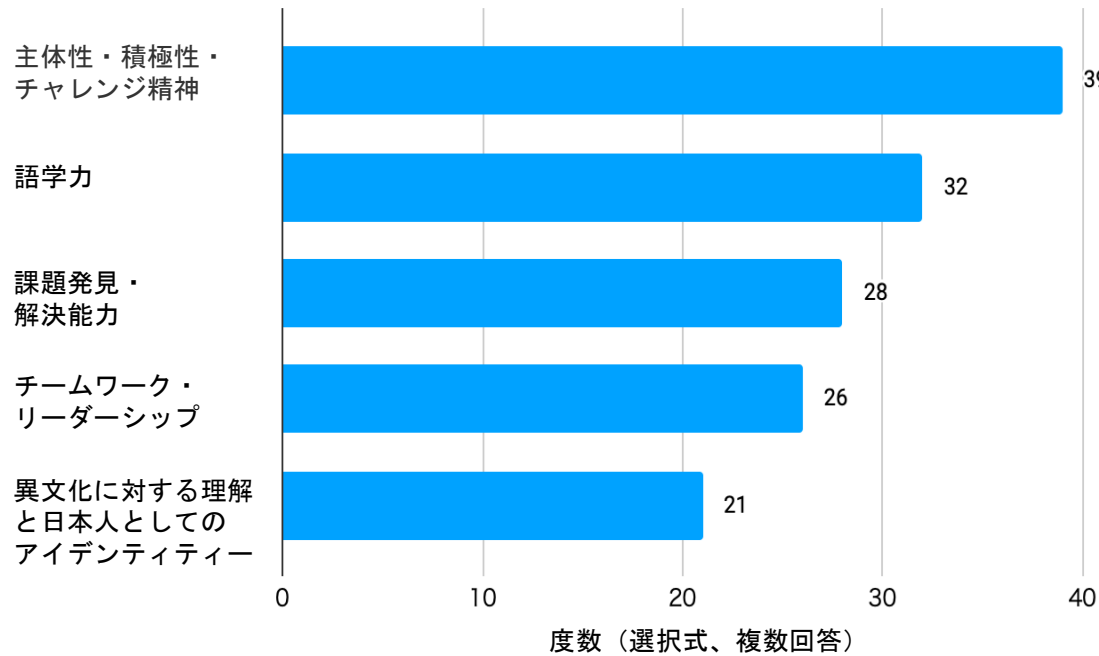


母集団：45大学

- 約5割の大学が、求めるグローバル人材像がIB教育が育む人材像に合致する為と回答。
- 約4割の大学が生徒の多様性（バックグラウンド、価値観、マインドセット）の担保が目的と回答。
- 国際化戦略の一環を目的として挙げた大学は約3割、語学力の高い学生の確保を目的とした大学は約1割となっている。

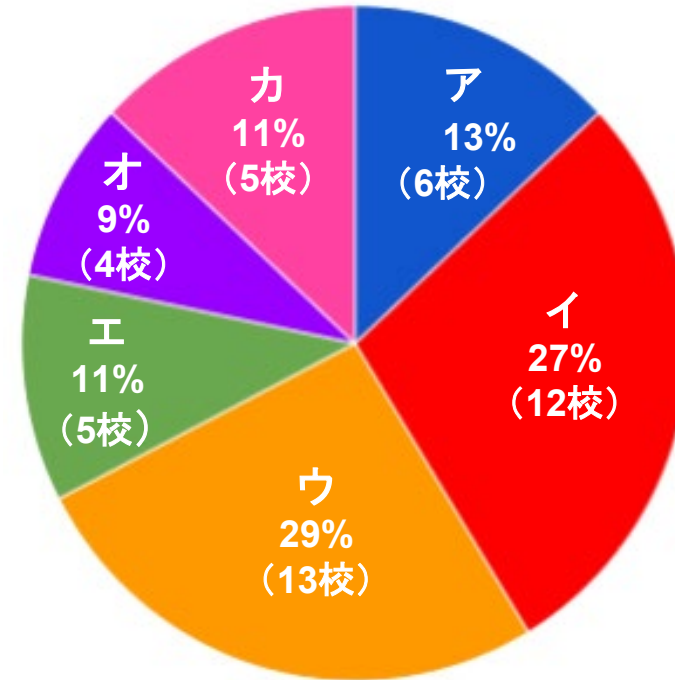
IBを入試に活用する大学がIB生に期待する資質

IB生に期待する資質



母集団：回答43大学

期待する英語運用能力



- ア 専門的な分野においてほぼ全ての内容を理解でき、論理的かつ流暢に自己表現できる。
- イ 専門的な分野において概要や意図を理解し言葉を効果的に用いて自己表現できる。
- ウ 専門的な分野において主要な内容を理解し一般的なコミュニケーションは支障なく行える。
- エ 日常生活において一般的なコミュニケーションはある程度行える。
- オ 英語力は問わない。
- カ その他

母集団：45大学

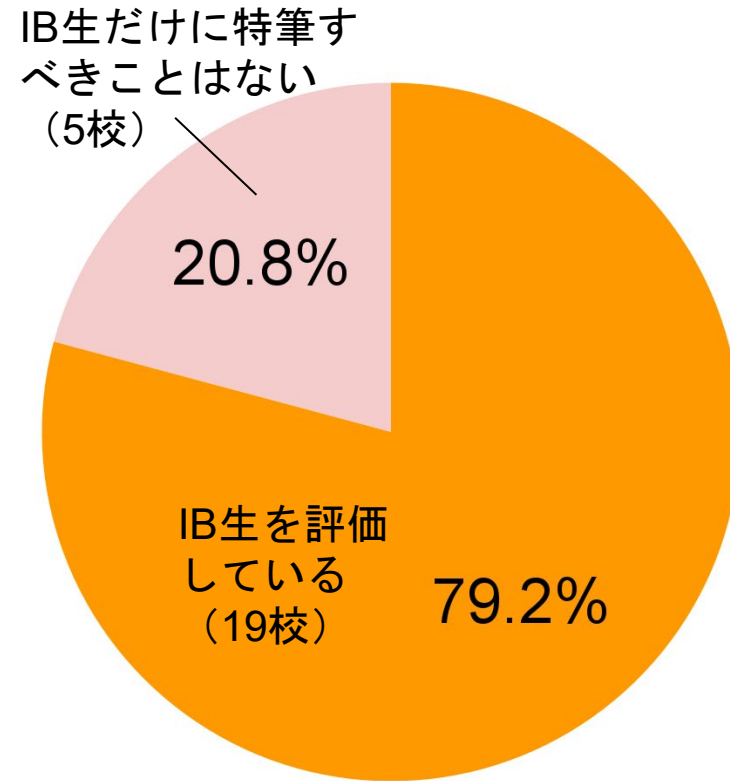
[IB生に期待する資質]

- 大学側がIB生に期待する資質は語学力に限らない。
- 約9割の大学が「主体性・積極性・チャレンジ精神」、約6割が「課題発見・解決能力」、「チームワーク・リーダーシップ」などを挙げている。

[期待する英語運用能力]

- 専門分野における高いレベルの英語力を期待する大学は約4割。

入学後のIB生に対する大学側の評価



母集団：回答42大学

- ・評価について回答のあった大学のうち約8割がIB生を高く評価している。
- ・評価しているポイントは、語学力・学力などの認知能力から主体性、異文化理解、課題発見・解決、リーダーシップなどの非認知能力まで多岐にわたる。

高校-1-1) IB生進路決定実態調査（生徒）（要約）

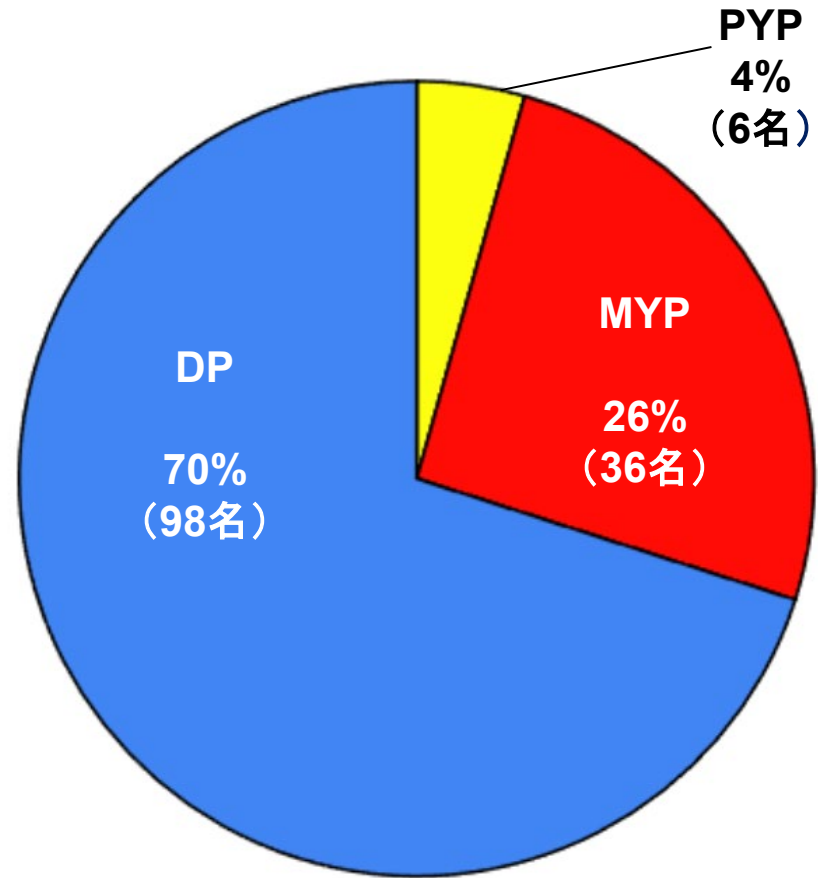


【概要】

”IBカリキュラムを採用する一条校の生徒（主に受験を終えた最高学年）”に対して進路決定に関し聞き取りを行い、その傾向を分析した。

1. 回答した学生の7割はDPコースからIBの学びを始めた。
2. IBカリキュラムを選択した理由のトップ3はカリキュラムの内容、自主性の尊重、語学力の向上もしくは進学の有利さ。
3. IBを通じて変化したと自覚する資質は、価値観・視野・考え方。
4. 国際関係のキャリアに興味をもつ学生が最も多い。

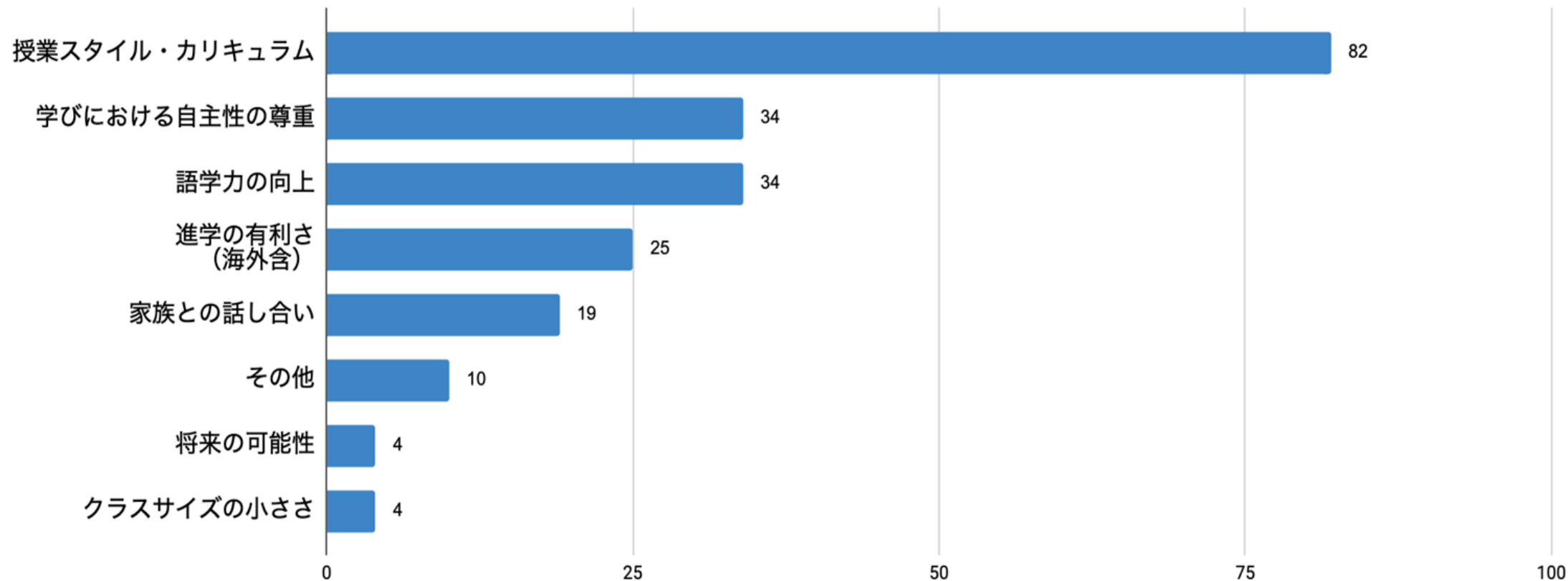
IBカリキュラムで学び始めた時期



母集団：有効回答数140名

回答者140名中、IBをDPから学び始めた生徒が70%を占める。
一方、MYPから開始した生徒は26%、PYPからの生徒は4%となっている。

IBコースで学ぼうと決めた理由

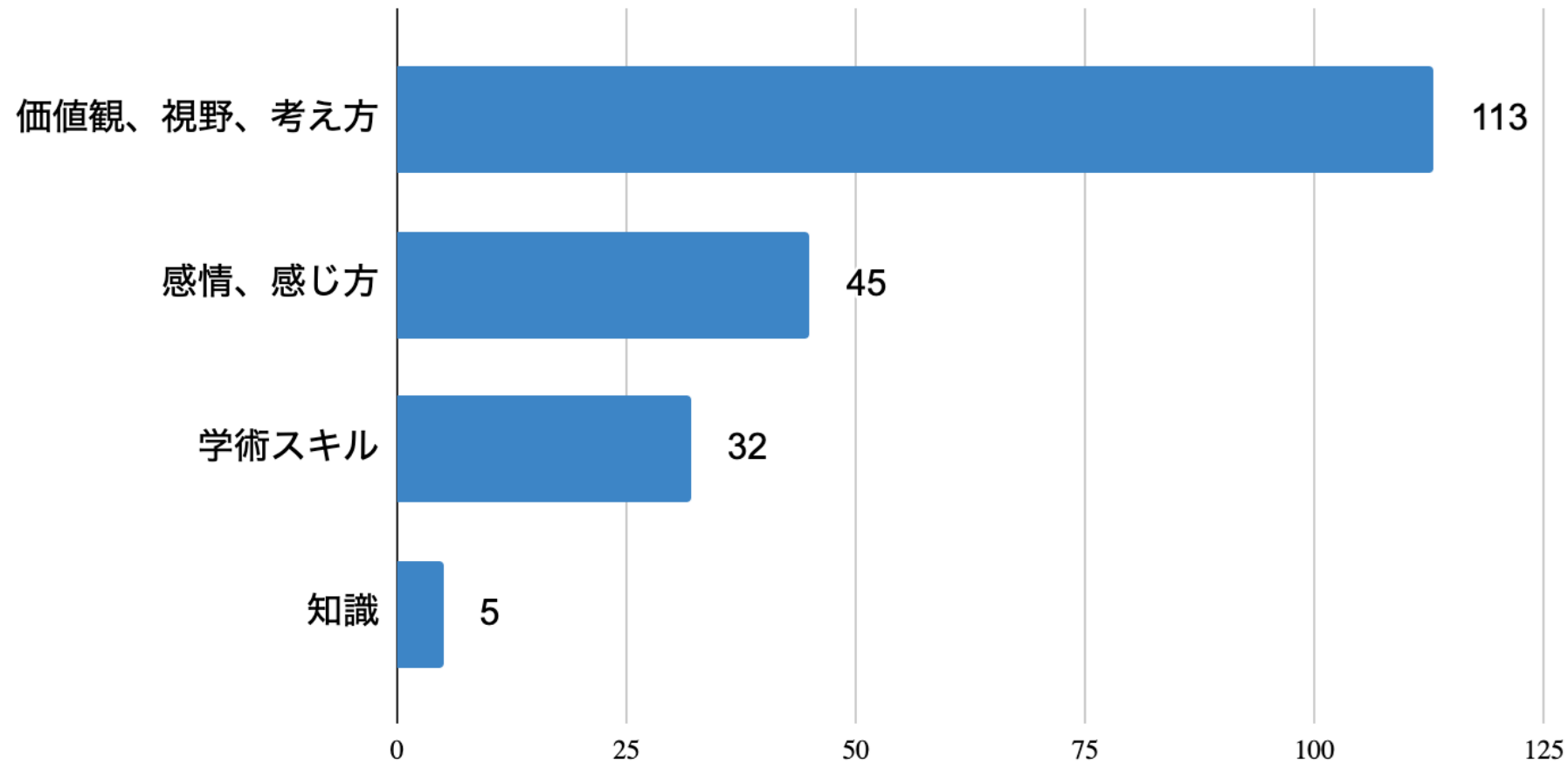


度数（回答は自由記述に基づき分類、複数回答）

母集団：有効回答数140名

IBコースを選んだ理由は「授業スタイルやカリキュラムの魅力」が最も多く82人の生徒が回答。次点として「学びにおける自主性の尊重」「語学力の向上」それぞれ34人と続く。

IBを通じて自分の中で変化したと感じること

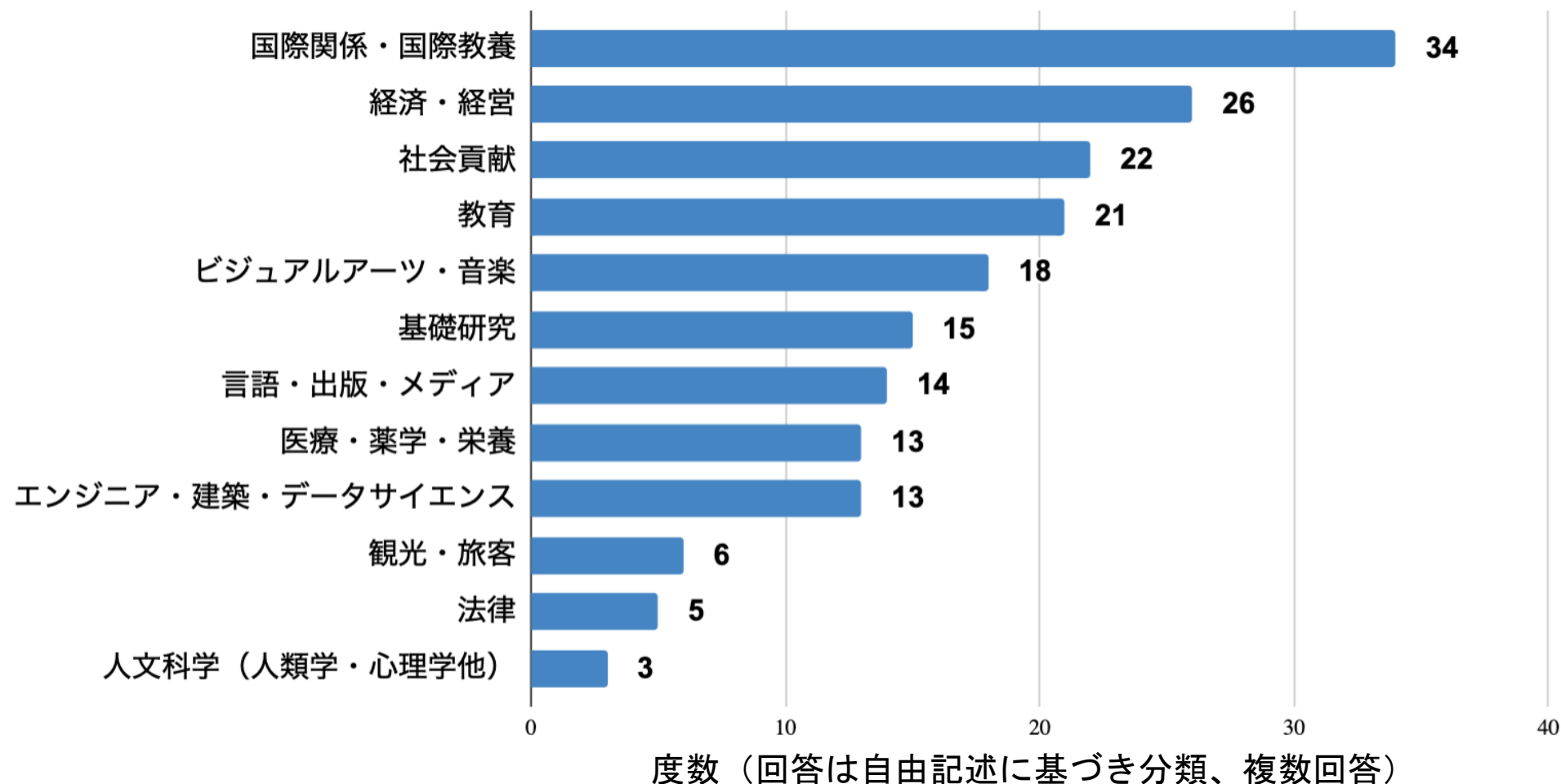


度数（回答は自由記述に基づき分類、複数回答）

母集団：有効回答数140名

IBの学びを通じ、80%の生徒が自身の価値観・視野・考え方に変化があったと回答。
32%の生徒が感情・感じ方、22%がスキルにおいての変化を感じるとしている。詳細は次頁以降を参照。

興味のある学問的専門分野、将来携わりたい仕事・夢



母集団：有効回答数140名

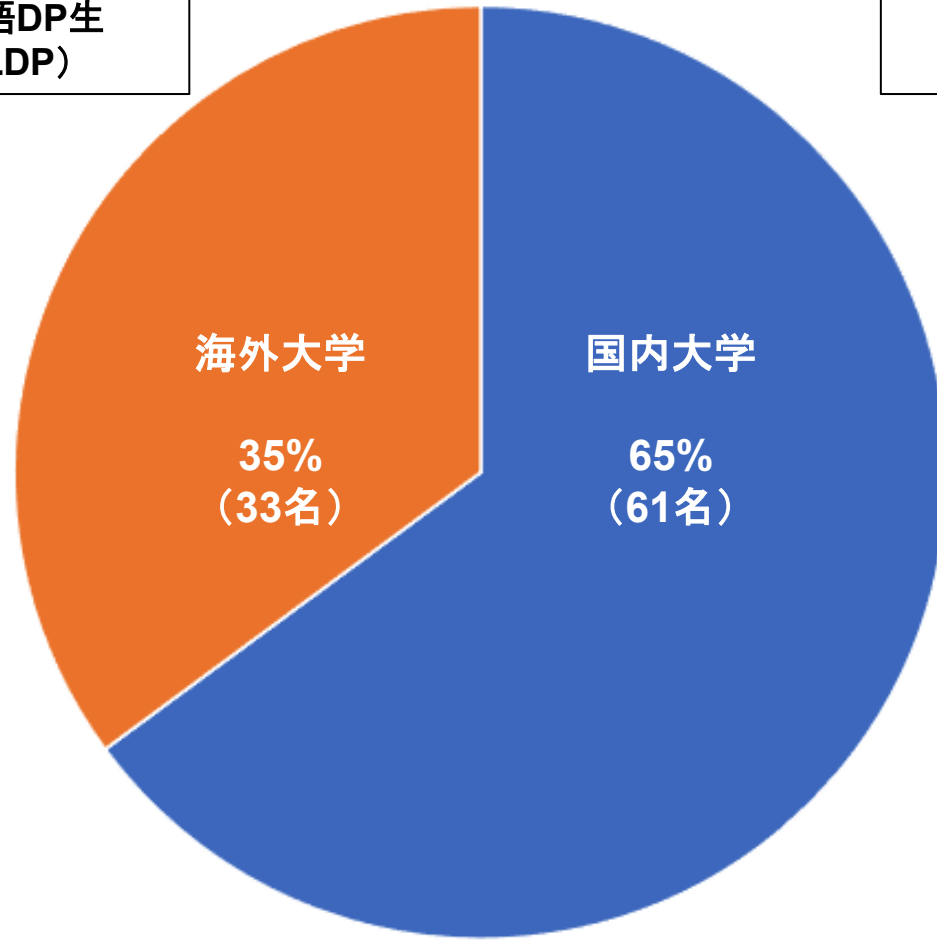
教科の枠を超えて人間社会の営み全体に興味を持つ生徒が多い。

特に国際関係/政治については4人に1人が興味ありと回答。

基礎研究、医療・薬学・栄養、エンジニアなどの理工系については各分野10%前後の生徒が興味ありと回答。

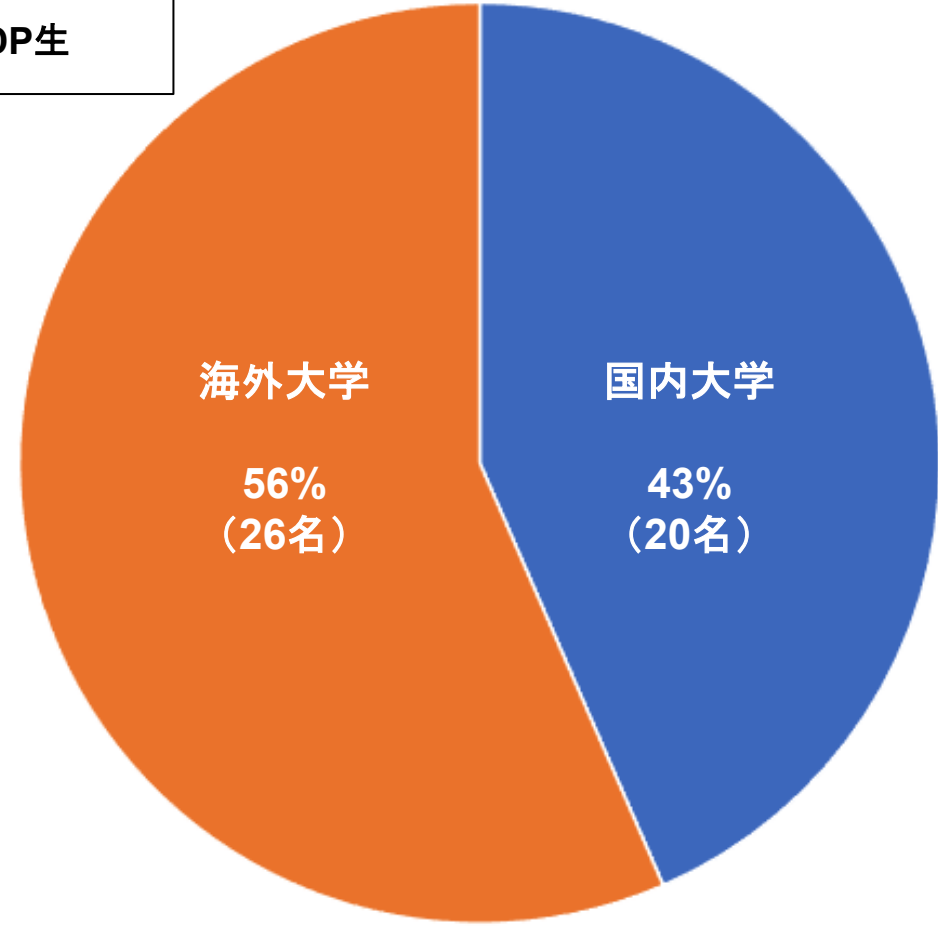
魅力を感じる進路（国内大学/海外大学）

日本語DP生
(DLDP)



母集団：有効回答数94

英語DP生



母集団：有効回答数46

英語DP生は過半数、日本語DP生は1/3強の割合の生徒が海外の大学に魅力を感じている。

高校-1-2) IB生進路決定実態調査（進路指導教員）（要約）

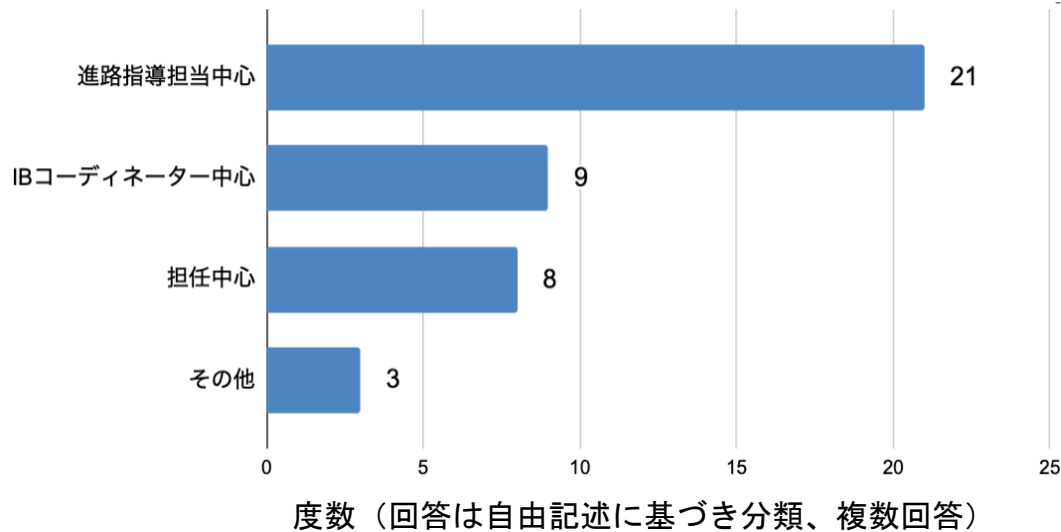


【概要】

”IBカリキュラムを採用する一条校の進路指導教員”に対して進路決定に関し聞き取りを行い、その傾向を分析した。

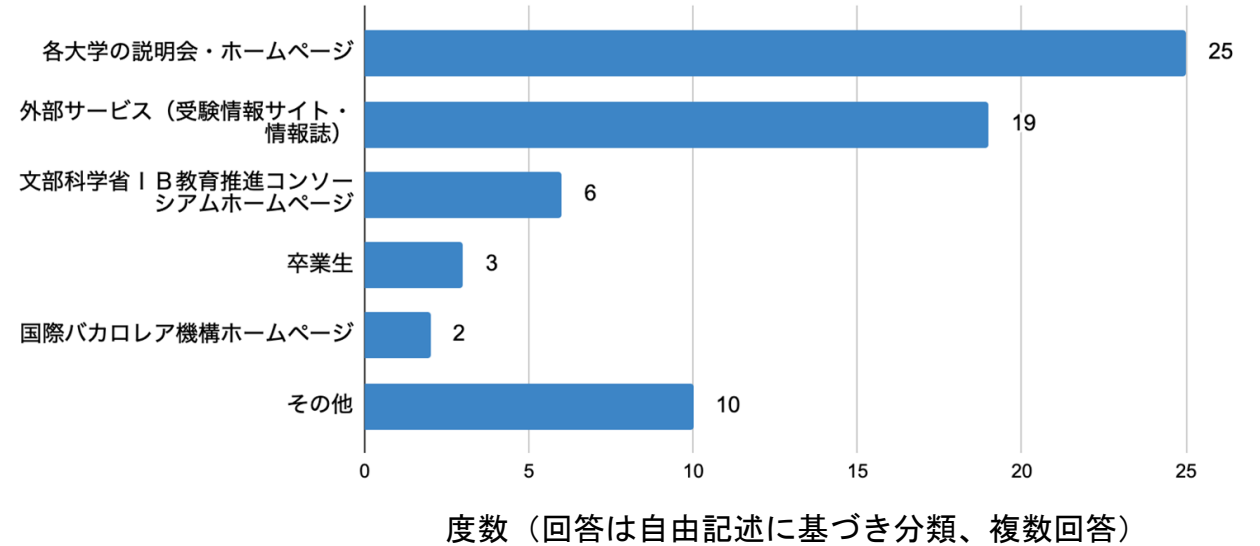
1. 進路指導担当が中心となり、IB生も担当する場合は過半数。他はIBコーディネーターと担当が半々。
2. 参考にする情報媒体は、現状では大学の発信する情報が最も多い。
3. IBを活用した入試に対する印象として、数自体が少ないこと、入試の要件や条件が実情に沿っていないことが多く指摘されていた。

進路指導の体制



母集団：37校

進路指導において参考にしている情報媒体



母集団：37校

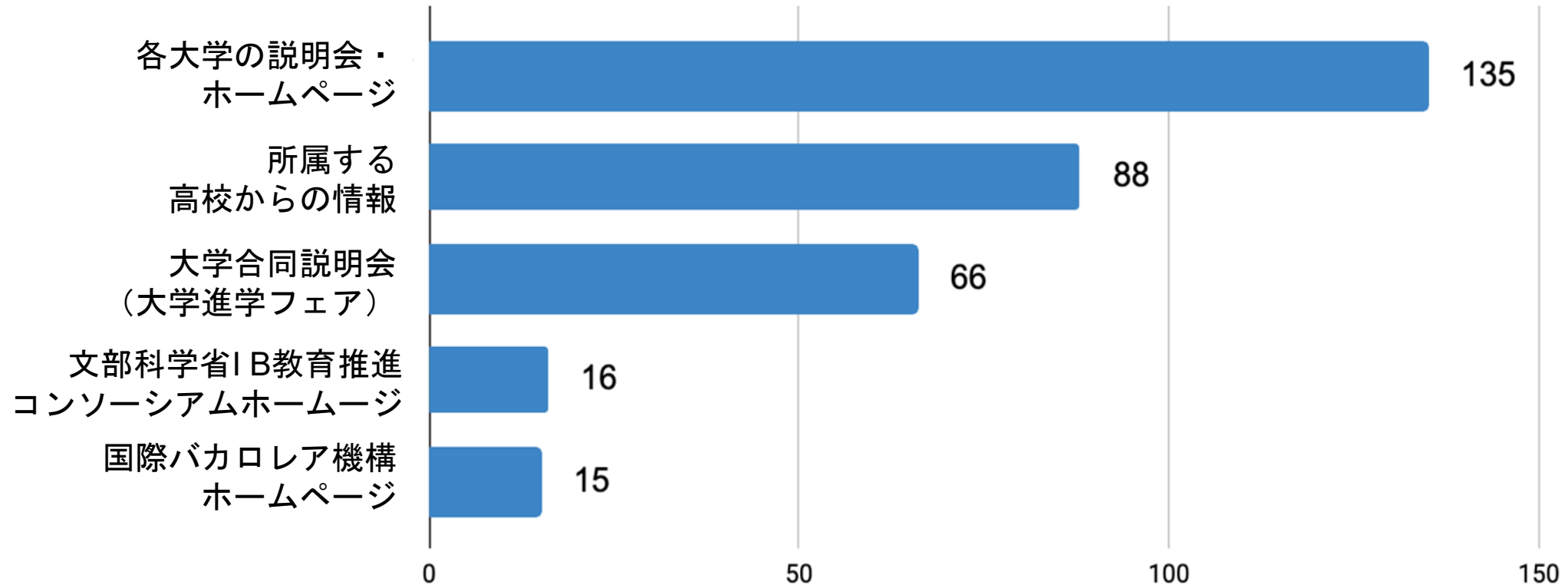
[進路指導の体制]

- 進路指導の体制としては、21校が進路指導担当者を中心としている。
- 一方、IBコーディネーターを中心としている学校は9校、担任を中心として指導を実施している学校は8校であった。

[進路指導において参考にしている情報媒体]

- 大学が発信する、説明会・ホームページ等の情報を参考にしている学校が25校で最多
- 受験情報サイト・情報誌などの情報（例：塾などが発信する情報）を参考にしている学校が19校で次点
- その他としては、各国領事館からの案内、高校独自の資料、該当国出身の教員からの情報などが挙げられていた

進路を選択するにあたり利用する情報源

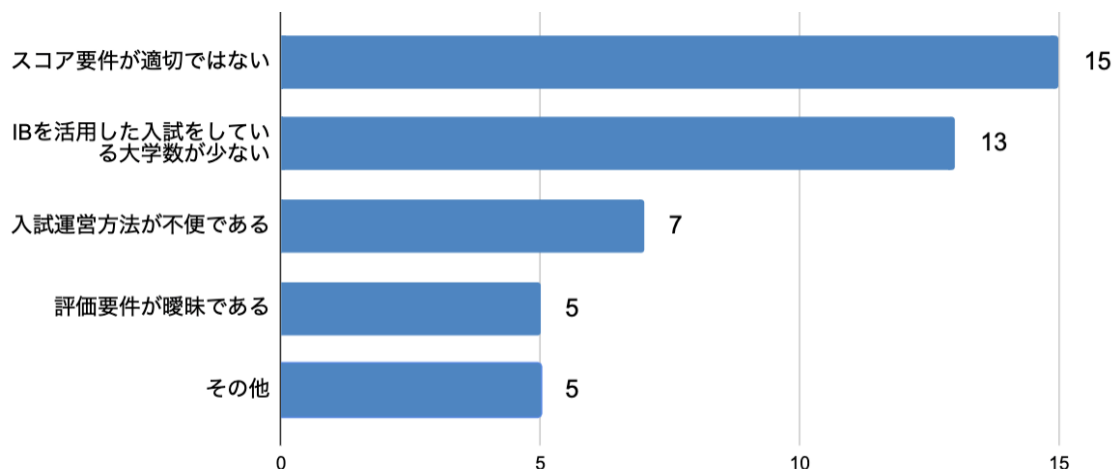


度数（回答は自由記述に基づき分類、複数回答）

母集団：有効回答数140名

進路を選択するにあたり利用する情報源として、96%の生徒が各大学の説明会やHPと回答。
所属高校からの情報 63%、大学合同説明会（大学進学フェア）47%と続く。
文部科学省IBコンソーシアムHP又は国際バカロレア機構HPを利用している生徒は10%前後。

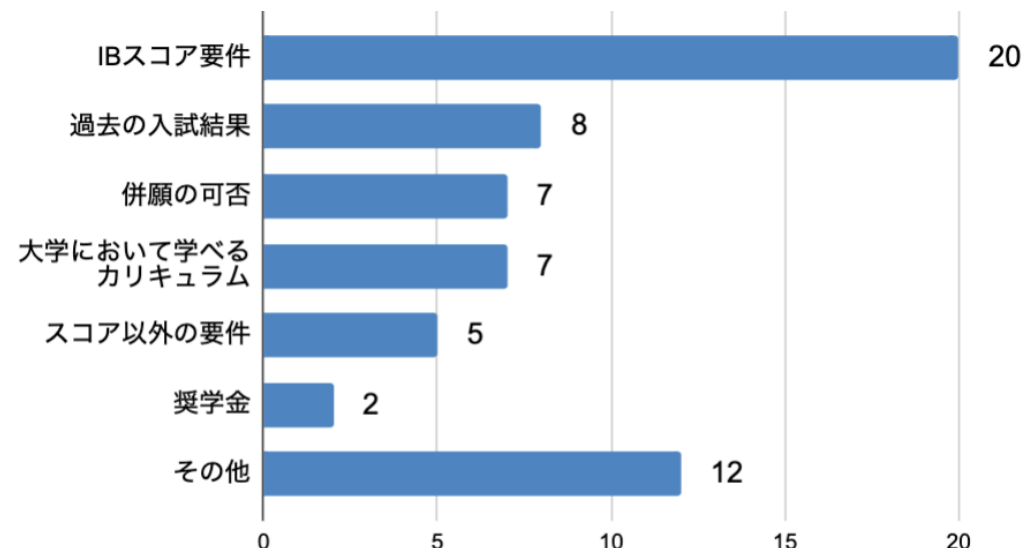
IBを活用した入試について感じること



度数（回答は自由記述に基づき分類、複数回答）

母集団：37校

進路指導にあたり大学の案内に明記されていると良い項目



度数（回答は自由記述に基づき分類、複数回答）

母集団：37校

[進路指導において参考にしている情報媒体]

- IB入試に関して、スコア基準が不適切に感じると20校が回答。評価要件の曖昧さを5校が指摘。
- IB入試の実施時期（IBスコアの取得時期との兼ね合い）や実施方法（他の形式の入試との併願の可否、生徒への負担が大きいこと）等に関して不便を感じていると7校が回答。
- その他には、理系学部への進学が難しい、実際の合格率を知りたい、大学における研究内容や入学後の学生へのサポート体制を知りたい等の意見があった。

[進路指導にあたり大学の案内に明記されていると良い項目]

- IBスコア要件・条件が明確になっていると指導がしやすいという声が多かった。

高校-2) 日本語DP（デュアルランゲージディプロマプログラム）と英語DPの比較調査 （要約）

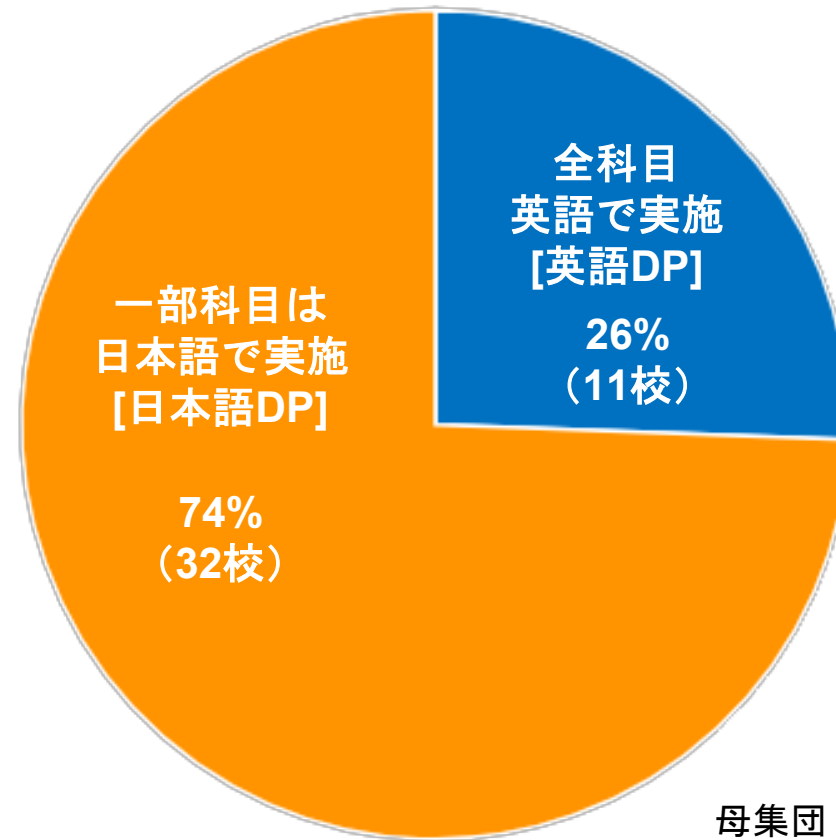


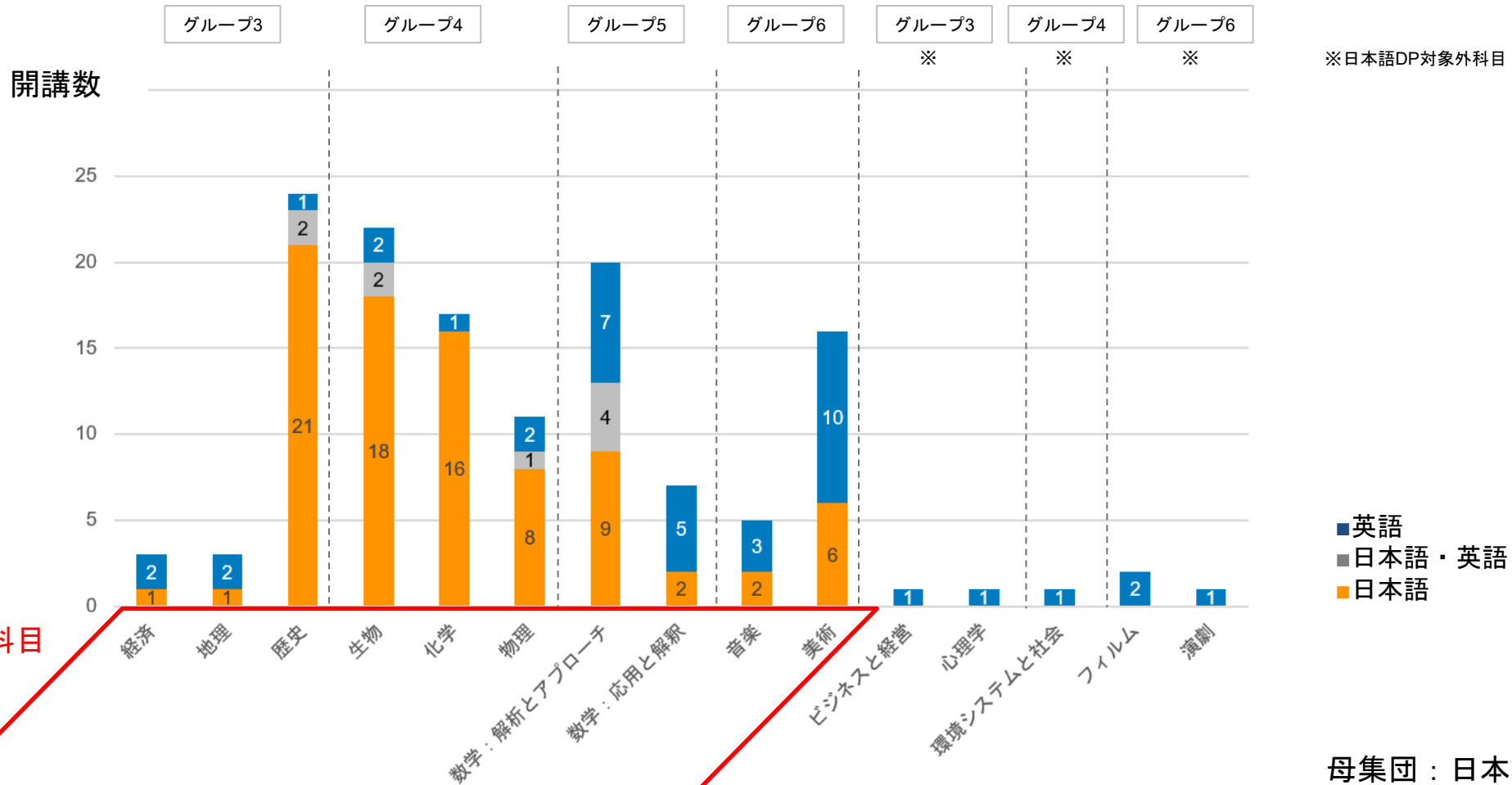
【概要】

”日本語を主要言語としてIBカリキュラムを採用する一条校”に対してプログラムの実施状況に関する聞き取りを行い、その傾向を分析した。

- 1.国内のIBプログラムを採用する一条校の中で、日本語を主要言語としているのは約3/4。
- 2.語学以外の英語履修科目を、歴史、生物もしくはは化学、数学の解析とアプローチ、美術を採用する学校が多い。
- 3.英語DP校と比較すると日本語DP校は科目選択の偏りが大きい傾向がある。

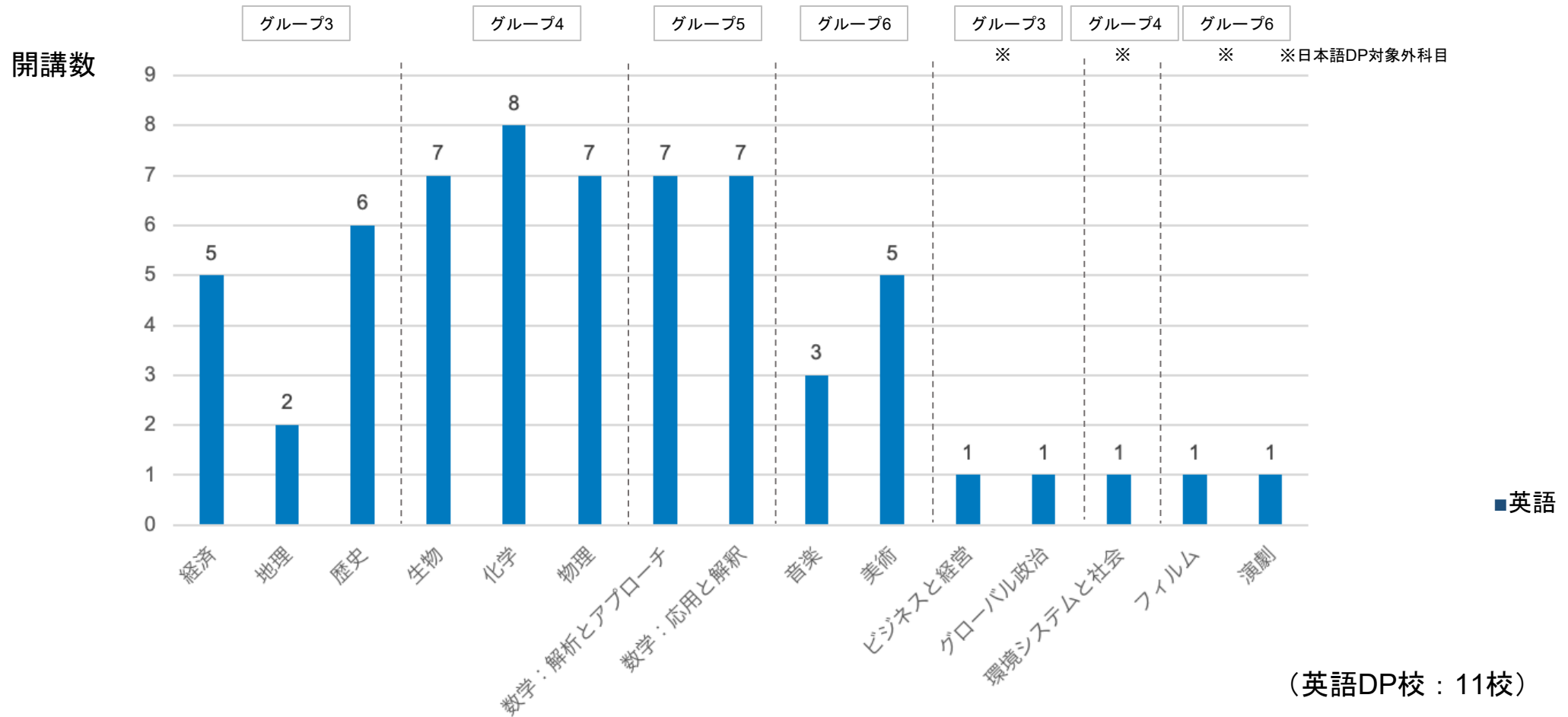
国内一条校における国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの実施言語





日本語DP対象科目

- ・IB科目として歴史、生物、化学、数学（解析とアプローチ）を開講している学校が多く存在する一方、経済、地理、音楽等の科目を開講している学校は比較的少ない。
- ・日本語DP対象科目のうち、歴史、生物、化学の順に日本語による開講が多く見られる。
- ・一方日本語DP校において、美術、数学（解析とアプローチ、応用と解釈）の順に英語による開講が多く見られる。



英語DP校においては、日本語DP校に比較して科目による開講数の偏りは少ない。